

## エッセイ 中東奮闘記－湾岸50年、オイルマンの軌跡

### 第七回 イラン・イラク戦争

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

#### 7-1 本社復帰 - 緊迫の度を深めるイラン情勢

1979年10月に私が丸善石油本社輸入部に復帰した時、イラン情勢はますます緊迫の度を深めていた。

年初の1月6日にイランを脱出したシャーはエジプトに亡命し、その後モロッコ、バハマ、メキシコを転々とした後、10月22日に癌治療のためニューヨークの病院に入院した。それ以来、在イラン米国大使館は、米国がイランでクーデターを起こすためにシャーを入国させたのだと信じて「大統領のカーターに死を!」、「米国に死を!」と叫びながら抗議する群衆に連日囲まれていた。

そして事件は起こった。11月4日の朝、400～500人の学生の一部が大使館構内に乱入し、大使館内にいた館員66名を人質として捕捉、シャーの身柄と財産の返還を要求した。まもなく女性職員などが釈放されたが、残りの館員は人質として残された。

事件が起こった日の午後、当時の丸善石油の嶋社長から「遠藤君、大変なことが起こったね。これから米国とイランはどうなるのかね」と訊ねられたのを鮮明に覚えている。

これによって石油価格は上昇した。

同年5月に30ドル/バレルを超えたアラビアン・ライトのスポット原油価格は、12月には36ドル/バレルを上回り、ナイジェリアやアルジェリア原油にいたっては、40ドル/バレルをも上回った。

42ドル/バレルのカタール原油が丸善石油に持ち込まれ、買うか買わざるべきかの緊迫の会議に加わったのもころのことであった。OPECは、11月にはアラビアン・ライトの価格を32ドル/バレルに値上げした。

米国は11月にイランからの石油輸入禁止や国内のイラン資産の凍結をし、翌年年4月1日にイランと断交した。同24日、カーター大統領の承認の下、「イーグル・クロウ（鷹の爪）と呼ばれた人質救出作戦が実行されたが、失敗した。

米大使館占拠の元凶となったシャーは、1979年12月にニューヨークの病院を退院してパナマへ、さらに1980年3月にパナマからエジプトに移り、同年7月27日に死去した。66歳の生涯であった。

#### 7-2 イラク出張 - 戦火の中を700キロのドライブ

1981年4月、私は輸入部から海外技術協力室次長に転出した。エンジニアを活用して産油国に技術協力の輪を広げることを狙って、新設された部署であった。

着任してまもなく、ADNOC（アブダビ国営石油会社）から丸善石油に連絡が入った。1982年に運転開始をするアブダビ西部にあるルワイス製油所への技術協力要請であった。「1985年に同製油所にハイドロクラッカー（水素化分解装置）を新設する。その設計、建設、運転を監督するエンジニアを3名ADNOCに派遣してもらうための国際入札をする。御社にも参加して欲しい」というものであった。

丸善石油では、「アブダビ石油を通じてアブダビとは長い付き合いがある。当社にはADNOCに強い遠藤がいる。入札に応じよう」ということになり、日本の他2社との競合となった。

7月には、ADNOCの担当者がエンジニア一面接のために来日。いろいろの経緯があったが、結局丸善石油が落札した。秋口に、私は3人のエンジニアたちを勤務先のSnamprogetti（現 Saipem）のミラノの本社に引率した。

派遣エンジニアの評判はすこぶるよく、その後のプラントの建設・コミッショニング（commissioning 試運転）についても、ADNOCから技術協力提供の要請があった。私は、「丸善石油から50人のエンジニアを出して、ADNOCの精製部門を乗っ取ろう！」とその受け入れを強く主張したが、「そんなに大勢のエンジニアは出せない」という会社側の説明で諦めざるを得なかった。産油国との大きなパイプ作りができるチャンスただだけに、残念なことであった。

その後、千代田化工がバグダッドの北約200キロのベイジで建設した製油所のコミッショニングとイラク人の運転指導について、同社から丸善石油に協力依頼があり、1982年6月に私はイラクに出張した。

当時はイラン・イラク戦争が勃発して2年目。戦時下のイラクに数十名ものオペレーターやエンジニアを派遣してもよいものか、丸善石油としても慎重に検討する必要があった。このための現地調査とINOC（イラク国営石油会社）からの情報収集のために、私とエンジニアの小森が現地に派遣されたのだった。

私たちが到着したバグダッド空港は、私が最後に訪れた数年前より新しくなっていた。空港建物は前よりも天井が高く広くなっていたが、がらんとした印象であった。町では、軍人の姿がいやに目立っていた。ホテルの部屋でテレビをつけると、軍服姿のサダム・フセイン大統領が長々と演説をしていた。相変わらず、横柄な態度であった。

翌日、私たちはベイジに向かった。途中の道路のあちらこちらに草で覆われた高射砲の砲台が築かれており、磨かれてピカピカの砲身が不気味に光っていた。戦時下の緊張感に身が引き締まった。

製油所は、ベイジの町を東側に入ったところにあった。辺りは、広い平地。遠く北東の方向に、低い山並みが見える。山の向こうは、イラン。その山麓辺りに、1927年にイ

ラクで最初に発見されたキルクーク油田がある。私が出張した当時はイラン機がその山を越えて、この平野部を爆撃していた。

この戦争は、1980年9月22日未明にイラクが突然イランの複数の空港を爆撃し、北部クルディスタンと南部フーゼスタンの数か所で国境を越えてイランに侵攻したことから始まった。

イラクの開戦理由は3つ、1975年にアルジェリアの仲介でイランとイラクが合意した「アルジェ協定」で返還が合意された地域の返還。シャットル・アラブ川の国境線を同協定で決まった中央線ではなく東岸までとする。イランが実効支配しているペルシャ湾に浮かぶアブ・ムーサ島、大トンプ島、小トンプ島のアラブ側への返還。以上を求めてのことだった。

領土の返還ではアルジェ協定の順守を主張し、国境線移動では同協定を破棄するという主張は矛盾しており、またアブ・ムーサ島などのアラブ側への返還はイランとUAEの問題で、開戦理由としてはとってつけたような言い分であった。

開戦当時のイランは革命後まもない時で陸海空3軍が壊滅状態。米国大使館占拠事件で国際的に孤立し、国内でもホメイニー体制がまだ固まらない状態であった。サダム・フセインが、イランが弱体化しているこの時期を懸案を一気に解決する好機と見て、戦争を仕掛けたに違いなかった。

サダム・フセインには、ホメイニーが唱える革命の輸出を阻止するという狙いもあった。国民の9割以上がシーア派の信者であるイランから、自国イラクの人口の6割を占めるシーア派を通じて、革命がイラクへ波及することを彼は本心から恐れていた。

当初は、イラン南部の港湾都市のホーラム・シャーハルを制圧し、イラン最大の石油精製基地のアバダンを破壊するなどイラクが優勢であったが、1981年になってイランが反撃に出た。11月に、アバダン包囲を打ち破り、1982年5月にはホーラム・シャーハルを奪還し、3万人のイラク兵を捕虜にした。6月にサダム・フセインがイランから撤退して停戦を受け入れるとしたが、イランはこれを拒否した。私がイラクを訪れたのは、この直後のことであった。

千代田化工の現場の責任者からプロジェクトの説明を受けた後で、私と小森は製油所内を視察した。イラン機の空爆でぽっかりと穴を空けられた11万キロリットルの巨大タンクが、無惨な姿を曝していた。鉄板がめくれてできた大きな穴からタンクの内に入って見渡すと、直径80メートル、高さ20メートルはあろうかという大きなタンクの天井から青空も見えた。「2度とこんな光景はみたくないものだ」と私は強く思った。

当時製油所はほぼ完成しており、建設作業員の数は700～800人に減っていた。イラン機が飛来すると作業を中断し、作業員は防空壕に避難すると聞いた。防空壕も見学した。溝を掘った上に厚い鉄板を埋め込んだ簡単なもの。薄暗い壕の中でしゃがんで見る、鉄板が分厚いので、爆弾が落ちてでも大丈夫そうだった。太平洋戦争の時に故郷の新潟で防空壕に入って以来、40年も経って中東で防空壕に入ろうとは思ってもみなかった。

I N O Cや日本の商社筋やメーカーなどから情報収集を行うためバグダッドに滞在した後、ガス・パイプラインのコミッションングの話があったイラク南部のルメイラ地区も見ておこうということになった。そこはイラク第2の都市、バスラの近く。

ユーフラテス河の畔にあるバスラは、対岸のイランから河を超えて連日砲撃を受けている戦場であった。どの程度危険かをバスラのシェラトンホテルに一泊して体験し、その後ルメイラを通過してクウェートまで突っ走ることにした。

交通手段は、タクシー以外にない。2人は町中でタクシーを拾って、昼ごろにバグダッドを出発した。バスラへの道は、バグダッドの南約150キロにあるクートから二手に別れる。イラン側の道はイランからの砲撃で危険だということで、私たちはトルコ側の道を走った。土漠の道を走っては村に入り、村をはずれては土漠の道を走り、町に入った。

どの村にも町にも、兵士の姿が眼についた。道路脇の小高い台地には大砲が設置され、イラン側に向けられた砲口が不気味だった。すれ違うトラックも軍用車が多かった。ここは戦場。緊張感の中で、タクシーは午後4時近くにバスラの町に着いた。

河畔のシェラトンホテルに行くため、車は幹線道路を左に曲がってバスラの中心部に入った。狭い道路の両側のあちこちの建物が、砲撃で崩れ落ちている。町には人影もない。不気味な雰囲気だ。みすばらしい民家が崩れ落ち、人影もないバスラの光景には内戦で焼け焦げたベイルート以上の恐怖を感じた。

やがて、タクシーはシェラトンホテルに着いた。ホテルはがらがらで、広いロビーにも人の姿がほとんど見当たらなかった。聞いてみると、夜になるとイラン側から砲弾が赤い曳光を引いて飛んでくるのが見えるという。「ここに泊まっての現地調査は無理、動き回るどころではない。下手に砲弾にでも当たったら大変！」とその夜の宿泊予約をキャンセルして、すぐにクウェートを目指してホテルを後にした。

バスラを過ぎてルメイラ油田辺りとおぼしき地域を通ると、道の左側にイランの砲撃でやられたという日本とイラク合弁の石油化学工場が目に入ってきた。いつ大砲の弾が飛んでくるか分からない。無事クウェートに到着することをひたすら念じながら、車を一路クウェートに向かわせた。クウェートまでは、あと20キロ。

クウェートとのイラク側の国境に着いたのは、夕暮れ時。税関は、たくさんの人で溢れていた。人混みをかき分けながら窓口に辿り着き無事に出国手続きを済まして、イラクとクウェートとの中立地帯をしばらく走った。だだっ広い土漠地帯。デコボコ道で、途中行き交う車はフォグランプだけのもの、ヘッドライトをつけているものなどさまざまだった。

やがて、クウェート側の国境に着いた。ここでバグダッドから来たタクシーとはお別れ。クウェートへの入国手続きを済ませて、クウェート・ナンバーのタクシーに乗り換えて、一路クウェート市を目指した。これで戦場とはおさらばとなり、一安心。一気に緊張感がほぐれた。

この頃には、辺りは夜の帳が落ちて真っ暗。途中からサウジアラビア・ナンバーの大型トラックがいやに目立ち始める。気がつくやうに、広い道路を埋め尽くしていた。サウジアラビ

アから野菜や果物を積んでクウェートに入る大型トラック群であった。戦争の影響で、生活物資を運ぶトラックがイラクを通らずにサウジアラビア経由となっていた。トラック群に挟まれながら、私と小森を乗せたタクシーはひたすら走り続けた。

やがて、砂漠のはるか遠く、車の左側にポツリポツリと灯が見え始めた。「車よ！あれがクウェートの灯だ！」、もう大丈夫だ。戦争のない国に入っていたのだった。あの暗闇の中のクウェート市の灯は、「灯台の灯のように私たちを守ってくれている」と思えた。

戦時下にバグダッドからクウェートまでタクシーで走ったあの緊張感はいまでも私の記憶にある。タクシーを乗り継いで700キロにも及ぶ冒険的なドライブであった。

サダム・フセインによるイラン領内からの撤退と停戦表明を拒否したイランは、秋以降にイラク領に逆に攻め込んだ。この逆侵攻はイラク軍の強力な反撃に遭い、戦局は一時的に膠着状態に陥った。その後、イランの再度の攻勢に追い詰められたイラクは、1984年3月以降に、イランのカーク島周辺でエクゾセ・ミサイル搭載のフランス製新鋭機によってタンカーや石油積出施設そのものへ攻撃を行い、戦火はペルシャ湾一帯にも拡大した。イランも、イラクを支持し攻撃し易いクウェート船籍のタンカーを集中して攻撃して、これに対応した。

1985年3月12日未明、前日のイラン空軍のバグダッド爆撃を受けて、イラク空軍機がテヘランを初めて空爆、イラン側の対空砲が一斉に火を噴いた。その後も爆撃が続き、各国国民のイラン脱出が始まった。JALのテヘラン便の運航が停止されており、イランの在留邦人は他国の航空機でのテヘラン脱出を図ったが、どの国も自国民の脱出を優先させていて、航空切符が入手できないでいた。

3月17日の夜、イラクが「3月19日午後8時以降、イラン全土の区域を『戦争空域』に指定する」ことを突如発表し、これにより民間機もイラクの攻撃を受ける可能性が生じ、以降民間航空機による脱出が不可能となった。JALは、要請された救援機の派遣を拒否。当時の日本は自衛隊機の派遣も不可能で、在留邦人は窮地に立たされた。

それを救ってくれたのが、トルコである。日本からの要請に応じ、トルコがDC-102機をテヘラン空港に派遣、第一便で198人、第二便で17人の邦人を2機のトルコ空軍の戦闘機の護衛の下、イスタンブールに無事に送り届けて運んでくれた。

トルコは親日国。遠因の一つが、明治23（1890）年9月16日夜半に和歌山県の檜野沖で時化で遭難した「エルトゥールル号」事件の時の日本の救助活動であった。今度は、日本がトルコから大恩を受けた。歴史は巡るのである。

1986年2月からイランは再度陸上攻撃にでたが、7月に反イランの姿勢を明確にした米国の介入を呼んだ。米軍がイランのオイルリグやフリーゲート艦などへの攻撃を行い、イランを封じ込めた。

その後イラクはイランのテヘランを含む主要都市をミサイルで、また猛烈な化学兵器による毒ガス攻撃で、イラクのイランへの再侵攻もありうるという形勢にいたった。

前年の7月の国連安保理で停戦決議がなされていたが、1988年8月20日になって

イランのホメイニーがこの国連安保理決議の受け入れを決断して、イラン・イラク戦争は停戦を迎えた。

イラン・イラク戦争は、サダム・フセインの思惑とは逆にホメイニー政権の確立につながったのは皮肉なことであった。イラン人はイラクから国を守るために一致団結し、革命に対する不満も和らいで行ったのであった。停戦から約1年後の1989年6月、ホメイニーはこの世を去った。

さらに、この停戦から2年後の1990年8月2日に、イラクは今度はクウェートに侵攻した。それから間もない同月15日に、イラクは対岸のイランを懐柔するために、アルジェ協定の受け入れ、イラン領内のイラク軍の17日からの撤退、国境の数カ所での捕虜交換の3条件で和平条約を調印する用意があることを突然表明したのである。イランも直ちにこれを受け入れた。これにより、1990年9月10日には、イラク、イラン両国の国交が回復した。

### 7-3 ニイガタ首長国連邦 - UAE との交流

話は前後するが、私がイラクに出張する1年ほど前の1981年6月下旬、わが家は長女葉子が脳梗塞に襲われるという不幸に直面した。長女は、その春立教大学理学部化学科の2年生になっていたが、6月に入って朝の決まった時間に起きて来なくなっていた。日が経っても状況が変わらないので、「きちんと健康診断を受けさせよう」と妻と話し合っていた矢先の突然の入院であった。

長女は2ヶ月ほどの入院の後、8月末に退院した。「病名は脳梗塞。何らかの原因でホルモンがアンバランスになって血液の固まりができ、それが脳の血管に詰まったのでしょう。それで周辺の脳細胞が死んでしまい、左半身が不随になったのです。それ以外はどこも悪くありません。後はリハビリ以外に、治療の方法はありません」というのが病院側の診断であった。

入院した時から、「娘はどんなことをしても治してやらなければならない。金はいくらかかっても仕方ない。海外勤務で蓄えた金も少し心細くなってきた。まとまった金を作るには退職金を貰うしかない」、こんな思いで私は転職を考え始めていた。

1982年に長女が大学に復学してから、私の転職への思いはいつそう強くなっていた。転職先として2、3の大手企業も候補にあったが、丸善石油の孫会社でアブダビで事業を展開しようとしていたアブダビ興産に転職した。「アラブの国とつながりを持つ仕事をしたい」という思いがあった。籍をアブダビ石油においていたので、給料も丸善石油より高かった。ただ、それまで25年間に亘って営々と積み上げてきたサラリーマンとしての貯金を0にしての転職であった。

1982年9月、丸善石油の社長室で私は嶋社長に退社の挨拶をした。「遠藤君、君はいいね。給料も上がるし、しかも重役で行くんだから定年は無いし」という社長に、私は「と

んでもない。今度行く会社はまだ出来たばかりの会社。海のものとも山のものとも分かりません。2年経ってこの会社がうまく行かなければ、私は水を飲んで暮らします」と啖呵を切った。

入社したアブダビ興産本社は、赤坂での15坪足らずの部屋2つだけ。陣容も総務部、業務部、技術部の3つ、専任副社長を含めて常勤者総勢9名。アブダビに支店があったが、丸善石油とは月とスッポンの零細企業であった。

業務内容は親会社のアブダビ石油の現地施設のメンテナンス、私が取締役業務部長として、その任に当たった。

1986年春のある日、アブダビ興産の社長を兼務していた親会社のアブダビ石油の村瀬社長から「駐日アラブ首長国連邦(UAE)の大使に会いに行くように」と言われ、ベンカラム初代UAE特命全権大使を渋谷にある大使館に訪ねた。そこで大使から、「ミスターエンドーの故郷は新潟だと聞いている。その新潟に『ニイガタ首長国連邦(UNE)』という団体がある。その団体がわが国と交流を進めたいと言ってきている。そこの交流促進に協力して欲しい」と依頼され、「首長国連邦の電話番号はここにある。連絡を取ってもらえないか」と言われた。

その場でダイアルを回すと、事務局長の高橋なる人物が出た。聞いてみると、「1984年に地域振興のために、新潟県内の朝日村、黒川村、笹神村、大和町、津南町、牧村の6町村が設立した団体。名前をニイガタ首長国連邦としたが、中東にアラブ首長国連邦という国があることを知った。首長国連邦という名前を付けるに当たっては、上京して在日UAE大使館を訪問して事前に了解を得た。いまは両津市と聖籠町が加わって8市町村の団体となっている。遠藤さんが新潟県の新発田市出身なら好都合。ベンカラム大使を新潟に招待することを計画している。UNEの東京駐在代表的な資格で、今後同国との交流に協力して貰いたい」という依頼を受けた。

「名前を付けるに当たって、わざわざ大使館に挨拶にきたとは、いかにも実直なわが故郷の新潟県人らしい」と感心しながらも、村瀬社長の了解の下でこの役を引き受けることになった。

さっそくその年の6月初旬に、招待を受けたベンカラム大使に同行して2泊3日でUNEに出かけた。新潟駅の新幹線ホームで高橋事務局長の出迎えを受け、すぐに新潟市郊外のメンバー町村の聖籠町で園芸試験場や水産加工工場を訪問、その後に中学校で全校生徒の前で大使に講話をしてもらった。通訳は私が引き受けたが、こんな大勢の前での通訳は私には初めての体験だった。

夜は伊藤UNE副大統領が村長を務める胎内村のホテルで、8町村長が集まっての歓迎会。翌日は、UNE結成の生みの親の中山与志夫大統領が村長を務める朝日村へ移動。村役場訪問や近隣の視察をして近くの温泉に宿泊した。

中山大統領は、日本でも有名な書の大家。翌朝は、同氏の書が奉納されている新潟市近くの越後一宮の弥彦神社に立ち寄った。そこで、私がベンカラム大使に日本の神道につい

で説明した。まず、「殆どの日本人が仏教徒でもあり、神道の信者でもある」と説明すると、イスラムの国に育った大使には理解しがたいようであった。「日本人の大半がクリスマスも祝う」と説明すると目を丸くした。

「神道には経典がない」と言うと、イスラム教でコーランを学び、信心深い大使には理解できないようだった。「日本では、いろいろな御神体を拝む、さらには誰でもが神様になれる。日本では、文人、武将、将軍などを祀る神社がある。私だって遠藤神社を作れば神になれる」と言うと、大使の頭は混乱したようだった。

「イスラムでは酒はご法度だが、日本の神様はお酒が大好き。だから、われわれも神にあやかって酒を飲みかわす。神社には酒樽が奉納されている」などと言おうものなら、トラブルになると思って、このことは言わずにいた。

旅行中に大使とはいろいろの話しをしたが、大使の父ダルウィッシュは、詩人、理髪師、治療師、イスラム教の導師、そして教師でもあり、当時アブダビでコーランを教える学校を運営していた。そこにアブダビの子供たちみんなが通っていたのである。1956年にイギリス政府が学校をアブダビに寄付するまでは、アブダビではこの学校が1つだけで、ダルウィッシュ先生がただ一人の教師であった。

その後のUNEとUAEとの友好親善についても述べておきたい。

1986年12月に、UNEは5人からなる第1回友好親善訪問団をUAEに派遣し、私は現地でこれに合流した。アブダビ側は、一時帰国中であったベンカラム大使が受け入れをしてくれ、自らも空港に出迎え一行の滞在中も案内役、後見人、時には運転手までしてくれた。

アブダビ政府招待というVIP待遇で、空港での貴賓室受け入れ、現地費用もアブダビ側負担、訪問先も外務省、農水省、商工会議所などへの訪問が組まれた。その時に聞いた「UAEには車やカニ風味のカマボコも来ているが、日本の人はUAEに来てくれない」、「UAEの実情を知って貰うために日本の農水省に招待状を出したが、ナシのつぶて」、「経済交流以外に人的交流、文化交流を盛んにしたい」などの現地の声は、当時の日本政府の冷ややかさへの反応であった。

また、各訪問先でパーティが開かれ、昼夜のご馳走攻めでこの親善訪問は満足のゆくものとなった。

1988年には、アブダビで「UAE・日本週間」が開かれた折に、UNEは7人からなる第2回友好親善訪問団を派遣し、同時に佐渡の鬼太鼓が参加した。私はこの参加の実現を支援する活動を行った。UAE・日本週間の事務局では、鬼太鼓でもプロ集団の鬼太鼓座を想定していたが、UNEが推薦してきたのは、島内の多くの祭礼で広く舞われる方の鬼太鼓。一般の人が叩く村の鬼太鼓であった。事務局では、当初難色を示した。事務局を仕切ったのは丸善石油の後輩、いかに丸善石油の先輩とは言え、難色を押し切って参加を認めてもらうのには苦勞した記憶がある。

この鬼太鼓チームは佐渡の町や村でのようにアブダビの市中のあちこちで踊りと音楽を

披露して現地の人との交流を深めてくれ、劇場でのプロ集団ではできない貢献をしてくれ、私はホット胸を撫で下ろした。

この時の片倉邦雄元駐UAE日本大使が1991年にUNEの招待で新潟を訪れ講演を行ったが、その時に私が同行した。その後の小池寛治UAE大使の新潟訪問の時も私が同行した。

その後、1993年からUNEが活動を停止する2015年まで、ほぼ毎年UAE大学の学生が来日し、その都度UNEを訪れた。学生たちにとってはニイガタでの体験が訪日中で一番の忘れがたいものであったと聞いている。私は、そのアレンジの手伝いやアドバイスをさせてもらった。

初めは男子学生だけが訪日したが、最後の2回は女子学生が訪問した。「男子学生には釣りや川下りのボート遊びが好評だったが、女子学生向けプログラムにも入れてよいですかね」との高橋事務局長からの問い合わせに、「大丈夫！」と答えたものの不安を感じていた私に、後日同事務局長から「大喜びでした！」との報告をもらって、安堵した記憶もある。

なお、1992年3月には、同年1月のUNE大統領からの書簡への返信の形で、ザイドUAE大統領からの親書がUNEニイガタ首長国連邦に届いたことも付記しておく。

#### 7-4 武士は食わねど高楊枝 - アラブ人の気風

アブダビ興産に入った私の楽しみは、随時のアブダビ出張と毎年夏の現地所長の休暇時に代役として、1ヶ月余りアブダビに滞在することであった。

その中で忘れ得ないのは、スポンサーのサガーとの交流である。彼は1935年生まれ。私よりは2歳年下であった。

1961年にアブダビで水を見つけて、奥地のリワの砂漠から出てアブダビに住みつけたのは、ブハラ族である。その本家がアル・ファラヒ家。現在のアブダビ首長筋のアルナヒヤン家はこのアル・ファラヒ家から分かれたものである。サガーは、由緒あるこのアル・ファラヒ家の当主。若い頃をリワの砂漠でベドウィンとして過ごしたという。

アブダビの砂漠で最初の石油の掘削が始まったのは、1953年で、彼がまだ20歳になる前のことであった。

砂漠での生活しか知らなかった彼は、そこで初めて西欧の文明と遭遇した。西欧人を見るのも初めてであったろうし、自動車や機械・各種資材なども初めて見、初めて触ったのである。その驚き様はいかばかりであったろうか。本家の当主になるべく生まれた彼は、この時に部落民を率いて石油掘削の下働きの仕事を指揮し、そこで大型トラックの運転方法を習得した。当時砂漠で大型トラックを運転出来るということは、いまでいえばジェット機を操縦出来るという以上のことだったに違いない。

その後彼は石油掘削用の資材や文明の利器について学び、アブダビの町に出てこれを取

り扱う事業を始めた。それをベースに建材、電気器具、自動車などの輸入・販売、航空会社や旅行会社のエージェントと事業を広げた。家柄の良さから、アブダビの草創期にはザイド首長から大臣への就任をしつこく要請されたようであるが、彼は実業家の道を選び、アブダビで有数の財閥にのし上がった。立志伝中の人物である。

旧知のアブダビ政府要人の紹介で現地スポンサーを引き受けてくれた彼とは、アブダビでも日本でもとことん付き合った。「サディーク（友だち）」以上の「アホイ（兄弟）」であった。アブダビに行けば、彼の事務所に日参した。アラビアコーヒーをすすりながら、他愛のないジョークを交わしての語らいが私の楽しみであった。

市内の住宅地にある豪壮な彼の本宅と、市の目抜き通りにある彼が所有するビルの最上階にあるゲストハウスも、わが家みたいなものだった。当時アブダビでは何台もなかったロールスロイスでの送迎付きで、私はよくここを訪ねた。彼の弟が住む彼の出身地のリワの砂漠にも4輪駆動車を連れて何回か訪れ、アブダビの海では豪華モーターボートや大型ダウ船を出して貰っては、釣りやクルージングを楽しんだ。

そういえば、私は砂漠を見たいという日本の著名な女性評論家の秋山ちえ子さんや女流作家の曾野綾子さんを彼の弟のところに案内したことがあった。秋山さんを案内した時に砂漠で供されたラクダの味は忘れられない。そのラクダはまだ生まれて3ヶ月の子ラクダで、あの柔らかい瘤のところが味は格別であった。キュロキュロという舌ざわりであった。当時日本で毎日のラジオ番組を持っていた秋山さんの帰国後の放送は、この砂漠行きの話が一週間続いたとか。

リワの砂漠で村瀬アブダビ石油社長がサガーからラクダを贈呈されたことがあり、その日本への輸送を検討するように私に指示があった。調べてみると、ラクダの輸送は容易ではないことが分かった。まず、運賃が当時の金で8百万円かかる。同行する世話人や食糧なども十分に確保する必要があった。それに、世話人をつけても、ラクダがストレスや暑さに耐えて無事にインド洋を越えられるかどうか、また通関や内陸輸送をどうするかなどの問題があった。

「ラクダに死なれては元も子もない」と思いあぐねていたところ、日本国内にヒトコブラクダがいると聞き、サガーから現金をもらって、業者を通じて日本の動物園から調達した。当時、たしか一頭4百万円だったと記憶している。

なお、その時のラクダが岡崎市東公園内の動物園にいた牝ラクダの「ミミ」であった。当時は3歳であったが、ラクダの寿命は30から40年、もうとっくに死んでしまっただろう。村瀬社長が岡崎市名誉市民であったことから同市の東公園に寄贈されたのであった。

サガーと付き合い、とくに印象に残ることがある。それは、アラブ人の名誉を重んじる気風である。

名誉にもいろいろある。私がとくに彼に見たものは、ホスピタリティと気前の良さ、そして威厳あるゆったりとした振る舞い、常に意識して体面を保つことであった。

私たちが船遊びや彼の家や砂漠で招待に預かっている頃、彼は保証をしていたアブダビ

No 1の財閥であった義理の兄の会社の倒産で莫大な負債に苦しんでいたことを後で知った。彼のホスピタリティ、気前のよさ、鷹揚さから、私はその時にはまったくそれに気付かなかった。

その事実を知ったとき、「武士は食わねど高楊枝」という日本の表現が私の頭の中に浮かんできた。いくら苦境にあっても、それを見せない。アラブ人としての名誉を保つ。彼は立派にそれをやり遂げていた。

## 7-5. クウェート侵攻と湾岸戦争 - イラクの論理

順風満帆であったアブダビ興産は、1989年にアブダビで落札したアブダビ石油とは別の石油会社のメンテナンス工事で赤字を出し、経営陣の刷新が行われた。アブダビ石油からの出向者であった私は、同年に心ならずも部長待遇でアブダビ石油に戻された。

そんな中での1990年8月2日午前9時過ぎ、アブダビ石油業務部での席に座ってまもなく、目の前の卓上電話が鳴った。出てみると、「エンちゃん、イラクがクウェートに侵攻したよ」と中東学者の小山茂樹からの電話であった。

朝のニュースでその情報をキャッチしてしていた私が、「歴史は巡るものだね。サウド家を再興したアブドルアジズが10歳の時の1891年に、ラシード家との戦いに敗れた父アブドル・ラーマン王に連れられて、砂漠をさまよって幾多の困難を重ねながら亡命したのがクウェート。百年経って今度はクウェートの王族一家がサウジアラビアに逃げ込むとは。こんなことがあるのだね」と小山と話したのをいまでもはっきりと覚えている。

その日の現地時間の午前2時、日本時間の午前8時に共和国防衛隊を主体とする「7000台の戦車と10万人以上のイラク軍が国境を越えてクウェートに侵攻し、市内に入ったイラク軍はダスマン宮殿を急襲した。クウェートのジャービル・アッ・サバーハ首長はサアド皇太子らとともに、攻撃のわずか6分前にヘリコプターでサウジアラビアに向けて出発して難を逃れた。首長の弟のシェイク・ファハドは国外から帰国したばかりで侵攻を知らされておらず、宮殿に戻るや共和国防衛隊と遭遇し、銃撃戦の末に射殺された。

イラク軍は空港と王宮、その後南部の油田地帯をたちどころに占領し、クウェート全土を5時間で制圧した。クウェート陸軍は16000人を擁していたが、約7000人はサウジアラビアに逃れ、その他は殺害されるか捕虜となり、一部はレジスタンス勢力として地下に潜った。空軍は、サウジアラビアの基地に逃れた。

イラクがなぜクウェートに侵攻することになったのか。

理由の第一は、原油価格の下落であった。

第2次石油危機によってアラビアン・ライトは1981年には34ドル/バレルという高値をつけたが、1982年に入ると原油価格の高騰による世界経済の不況による需要減、重油に対して価格的に優位に立った石炭への転換、さらには非OPEC産油国による供給増によって原油価格は下降に転じた。OPECは生産上限を設けて対応したが、効果はな

かった。

1983年にOPECは初めて原油値下げに踏み切り、アラビアン・ライトを29ドル／バレルとした。その後OPECは初めて各国の生産割当を行ったが、効果はなかった。1985年にはアラビアン・ライトを1ドル／バレル引き下げ、サウジアラビアがスイング・プロデューサー (swing producer) として自国の原油生産を減少させて、この価格水準の維持に努めた。

これによって、サウジアラビアの生産量は1979年の925万バレル／日から、1985年4～6月には260万バレル／日に激減し、サウジアラビアの石油収入はピークの1981年の1190億ドルから260億ドルまでに落ち込んだ。さしものサウジアラビアもこの国家収入の激減に耐え切れなくなり、同年10月からは増産に転じ、価格も消費地の石油販売価格から逆算して原油の値段を決めるネットバック方式に転換した。これによって原油価格の決定権は産油国から、市場に移ることとなった。

サウジアラビアのこの政策転換によって、1986年に入って原油価格は急落した。北海原油 (ブレント原油) は9ドル／バレルへ、ドバイ原油は7ドル／バレルとなり、原油のスポット価格はバレル当たり10ドルを割り込んだ。

この安値に危機意識を持ったOPECは自らも減産し、非OPEC諸国にも減産を呼びかけた。また、同年12月に1987年1月から固定価格制度に復帰することを決定し、アラビアンライトを含む七原油の平均公式販売価格を18ドル、アラビアン・ライトの公式販売価格を17.52ドル／バレルとした。これは、ピーク時の価格の約半値であった。また、1～6月のOPECの生産上限枠を1580万バレル／日に設定した。サウジアラビアのネットバック販売の廃止も合意された。

これによって市況は立ち直ったが、原油価格は、ますます市場価格に左右されるようになり、市場価格連動の販売契約が主流となった。1988年11月のOPEC会議では「18ドル固定価格制」を新たに「参照価格」として設定することが決議されたが、それは単なる目標価格となり、原油価格が市場に任されるようになり、事実上無意味となった。

原油価格の下落によって、その後徐々に石油消費は回復に向かい、OPECに対する原油需要も回復していった。OPEC各国は、この時点で価格維持より生産拡大を目指した。1990年初めに20ドル／バレル以上で推移していた原油価格は、この増産により7月までには6～7ドル／バレルも値を下げている。この値下げでいっそうの財政悪化に苦しむことになったイラクは、「原油価格の値下がりにはクウェートとUAEがOPECが決めた生産枠を守らずに増産しているせいだ」と非難していた。同月15日付けのフセインからアラブ連盟宛の書簡でも、名指しで両国を激しく非難した。

第二に、国境問題である。イラクは、「イラン・イラク戦争以来、クウェートはイラク領内に軍事施設、石油施設、農場などを建設してきた。これはイラクに対するクウェートの軍事的侵攻である。また、クウェートが両国国境に接するイラク南部のルメイラ油田から盗掘した」として24億ドルの弁済を要求した。クウェートは7月19日付けのアラブ連

盟宛の書簡で、この主張を完全に否定した。

第三に、イラン・イラク戦争の債務を巡る問題である。イラクは、「イランからの革命の輸出を怖れる湾岸諸国のために戦った。これらの国からの借款は帳消しにするのが当然」と主張していた。300億ドルを提供したサウジアラビアは早期にこれに応じたが、各100億ドル、50億ドルを提供したクウェートとUAEはこれに応じなかった。

当時のイラクは、長年に亘るイラン・イラク戦争のため財政が破綻状態にあった。ひどいインフレに襲われ、イラク・ディナールは急落、債務は国家財政を上回り、港は破壊され、油田は荒廃し、石油輸出もままならなかった。7月17日のイラク革命記念日でも、サダム・フセインは、「一部のアラブ諸国（クウェートとUAE）が、原油価格を下落させている。身代わりとしてイランと戦ったイラクへの恩義を忘れた行為だ。逆に、毒の短剣を背後から突き刺す行為に等しい。言葉で分からないならば、なんらかの行動に出る」としていた。

7月24日にイラクがクウェート国境に陸上部隊3万人を終結させると、翌25日にはエジプトのムバラク大統領がバグダッドを訪問。彼と会談したサダム・フセインは、「クウェートへの侵攻は行わない、クウェートとは交渉を行う」ことに合意した。

28日には、サウジアラビアのジェッダでイラク革命指導評議会副議長とクウェート首相の間で交渉が行われたが、8月1日に決裂した。交渉は、根拠のない領土問題などを吹っ掛けたイラクもイラク、それに対してけんもほろろの態度だったクウェートもクウェート、だったと仄聞する。クウェート側の態度がサダム・フセインの「馬鹿にするな！」という怒りを誘ったのは間違いあるまい。

ただ、こう怒り狂う背景には、フセインなりの計算があった。侵攻の8日前の7月25日のグラスビー米大使との会談での彼女の「われわれは、国境問題のようなアラブ間の紛争には何ら意見をもっていない」という発言やブッシュ大統領からの書簡でのイラクに対する米国政府の融和的な政策から、サダム・フセインはアメリカの介入の可能性は無視してよいと判断したのである。

そして、翌8月2日にイラク軍がクウェートへの侵攻に踏み切った。当初、サダム・フセインは同国の属国化を狙って、4日に「クウェート暫定革命政府」を発足させたが、国際社会の承認が得られないことが分かるとクウェートの併合を決定し、バスラ県の一部を加えイラク19番目のクウェート県とした。

これに対し、米国の動きは速かった。イラクの侵攻後数時間後には国連安全保障委員会を開催し、イラク軍の即時・無条件撤退を決議し、6日にはイラクに対する経済制裁、26日には海上封鎖の実施などを決議した。

この間の8月18日にイラクは、クウェートから脱出できなかった外国人を自国内に強制連行し「人間の盾」として人質にすると国際社会に発表。その後アメリカやイギリス、またドイツやフランスなどの非イスラム国家でアメリカと関係の深い国の民間人を自国内の政府や軍事施設などに監禁した。、それまでイラクに9000億円を超える多額の経済援

助を行い、原油も多く購入していた日本も前代未聞のこの人質作戦の対象とされた。

イラクに対し外国人の出国を認めるよう求めた国連安保理決議664の採択を始めとして、国際社会が総意として外国人人質の解放を求めた結果、12月6日、サダム・フセイン・イラク大統領は人質の全員解放を発表した。

国連安全保障理事会は、イラクが国連の度重なる撤退勧告を無視してクウェートの占領を継続したため、これに先立つ1月29日には「イラク軍の撤退期限を1991年1月15日とする」との決議、いわゆる「武力容認決議」を行った。

翌1991年1月17日には、国連認可の下で、アメリカのジョージ・ブッシュ大統領の呼びかけによって編成された「多国籍軍（アメリカを主力に、西ヨーロッパやアラブ諸国など34ヶ国が参加）」がイラクへの空爆を開始した。いわゆる湾岸戦争の勃発である。

同18日には、「国連決議を履行しろというなら、イスラエルはどうか。イスラエルは国連決議を無視して、パレスチナのヨルダン川西岸及びガザ地区、シリアのゴラン高原を占領し続けている」と主張していたサダム・フセインは、43発のスカッドミサイルをイスラエルに打ち込んだ。イスラエルはアメリカや国連からの要請を受けてイラクへの報復を思い止まり、これによりアラブを味方に付けて「国際社会対イラク」から「欧米対イスラム」の戦いに持ち込もうとしたサダム・フセインの目論見は外れた。

同23日、イラクはアメリカ海兵隊の上陸を阻むため、400億ガロンの石油をペルシヤ湾に流失させ、700の油井にも放火した。因みに、この火災は、およそ10ヶ月後の11月になってようやく鎮火されることとなった。

2月23日に多国籍軍は陸上の戦闘に踏み切り、同27日にはクウェート市を解放し、さらにイラク領深く進攻した。3月3日にイラクが停戦協定に調印して、戦争は終わった。

なお、この戦争は、お茶の間のテレビに初めて映し出された戦争でもあった。多国籍軍から撃ち込まれる巡航ミサイル、燃え上がる油田や海洋汚染で油まみれになった海鳥たち、イラク軍がイスラエルに撃ち込んだスカッドミサイルなどの生々しい映像は、いまもはっきりと私の記憶にある。

## 7-6. 湾岸戦争が日本に残したもの - 自衛隊の海外派遣

湾岸戦争は、日本にいろいろな疑問と課題を残した。

まずは、イラクの侵攻が予期できなかったのかという疑問である。

侵攻の4日前に、クウェートの日本大使館では夏祭りが行われた。4日前と言えば7月29日、サウジアラビアでイラクとクウェート間の交渉の真ただ中のことである。さらに、イラク侵攻当時、駐クウェート日本大使は休暇中で不在だったことから、イラクとクウェートとが陰悪な状態にあったのに、侵攻を予期できなかったという点を責める声がいっそう強かった。

イラク側でも状況は変わらなかった。侵攻当時、駐イラク日本大使も休暇中であった。弁護するわ

けではないが、この時期は、酷暑の中東では夏休みの時期で、米・英・ソ連など主要国の駐イラク大使も休暇中であったのも事実である。

駐イラク日本大使はイラク侵攻後の8月3日には滞在先のイスタンブールからアンマンに飛び、5日にはアンマンから陸路バグダッドに帰任した。駐クウェート日本大使も帰任を試みたが、占領下のクウェートへの帰任は叶わなかった。

7月末にイラクの部隊が集結していたのは偵察衛星でキャッチされており、イラクとクウェートの交渉決裂に至るまでの状況は逐一把握されていた。それでも、フセインの最後の決断までは、侵攻は予測できず、世界で8月2日の侵攻を予測した人はいなかった。

次に、人質問題に関しても、どうしてイラクに逃れたのか、「人質になるかもしれない」という危惧の中で。他に方法はなかったのかという非難もあった。

イラク侵攻直後のクウェートでは外出禁止令が出ていたため、在クウェート日本大使館は当初在留邦人に対して自宅待機を勧告したが、8月7日になって全員に対して大使館への避難勧告を出した。この結果、246人のクウェート在留日本人が大使館地下一階ホールに集まった。雑魚寝、水、食糧など不自由で節約、節約の生活の始まりであった。

14日には、「クウェートという国は消滅してイラクの県になった。大使館は在イラク大使館だけでよい。在クウェートの大使館はいらない」という考えで、イラクは「24日をもってクウェートにおける全外国公館の外交特権は消滅する」と通告した。日本大使館は外交特権のある間に、邦人をどこかに避難させる必要があった。陸路でサウジアラビアへ、などの案もあった。現に休暇でクウェートに来ていたサウジアラビア駐在のアラビア石油の社員2人は、侵攻後にサウジアラビアに車で無事に帰っていた。

ただ、サウジアラビアへ逃れた欧米人が国境で殺されたとかのニュースも流れ、在バグダッド日本大使館の管轄に置く方がより安全という判断で、22日、23日に各2便のイラク航空のチャーター便で全員をバグダッドに避難させた。

ところがである。ここがかつて経験したことのない事態に遭遇したのである。バグダッド空港に迎えにでていた片倉駐イラク日本大使の目の前で、到着した246人全員が「人質」としてイラク側のホテルに収容されてしまったのである。日本側は、別途宿泊すべきホテルを手配していたのにである。日本側のイラクへの必死の抗議も通じなかった。

そして26日には、10数人の主に単身女性以外の人が、18グループに分かれて国内の空港、製油所、ダムなどの戦略上重要な30数ヶ所の施設に連れ去られ、「人間の盾」として利用されたのである。イラク側は、この人たちは「人質」ではなく「客人」と主張した。フセインの悪知恵である。

欧米人はともかく、イラクに対して経済技術面で多大の貢献していた日本人が人質になった事に対して日本で異を唱える人が多かったのだが、日本政府は侵攻後ただちに行われた国連のイラク軍の即時・無条件撤退決議を支持し、イラクに対する経済制裁に至っては他国より1日早い8月5日に発表していたのだ。イラク側から見ると、「日露戦争に勝ち、アメリカと戦った、またわが国の経済復興にも寄与してくれていることで一目おいている日本がこう

いう態度をとるとは」と思って、欧米人ととも日本人を人質にしたのは当然のことだったのである。

人質は、突如26日に、女性・子供68人と国連職員と出光興産の駐在員が解放された。それより5日前の英国のマーガレット・サッチャー首相の「あなたは、それでも男なの！」と言わんばかりの激しい批判がサダム・フセインには堪えたのかもしれない。

11月7日には、イラクを訪れた中曽根元首相とサダム・フセインの交渉によって邦人人質とイラク在留邦人66名が帰国した。

先に帰国した女性たちによって結成された「あやめ会」は、ご主人たちの解放に向かったの行動を開始したが、これに呼応してアントニオ猪木参議院議員が動いた。9月18日にはバグダッドに視察に入り、外務省が強い危惧の念を持つ中、12月1日には「あやめ会」のメンバーと共にバグダッドに入り、彼が発案した「平和の祭典」を同月2-3日に開催した。

初日は、サッカーの試合、日本、アメリカ、フランスの音楽家によるコンサート、2日目には空手とプロレスの試合。このイベントには日本人の人質も含めて大勢の観客が詰めかけ、イラクの国内中にテレビでも放映された。このイベントのイラク側の窓口になったのは、サダム・フセインの長男でスポーツ大臣のウダイであった。3日夜にウダイに会った猪木は、ウダイの提案に従ってサダム・フセインに人質解放を願う手紙を書いた。

これも功を奏したのか、既述の通り12月6日にイラクが突然の人質解放発表を行った。11日に残り的人質78人がクウェート大使館員14人や外国人便乗者らとともにイラク航空のチャーター機で、JALの救援機が待つバンコック空港に向かった。かくして、人質問題は解決した。8月2日のイラク侵攻以来4ヶ月かかったが誰1人死者もなく全員が無事に帰国できたのは幸いであった。

この中でのこぼれ話を紹介しておこう。

クウェート在留日本人が大使館地下一階ホールに集められ、その後そこで雑魚寝の日々を送ることになったことは既述した。その中に、見慣れない日本人女性がいたという。みんなが「あの人、誰？」と訝ったその女性は、某商社のクウェート所長が日本からクウェートに連れて行き、密かに同棲していた女性だったと判明。誰もその存在を知らなかったという。イラク侵攻のためにこの事がバレて、その所長さんは「悪いことはいことはできないものだ」と身に染みていたに違いない。ただし、この話は仄聞したもので、真偽のほどは明らかではない。

これと似た話は、アブダビでも聞いた。こちらは、かつてアブダビに駐在していた時の友人の奥さんから私が直接聞いたので確かな話である。「アブダビから帰国してから、私も役員をしていたアブダビ日本人会の婦人会の会長をやっていた方のご主人が亡くなり、その葬儀が東京で行われたの。ご主人は某大企業のアブダビ支店の所長さん。私もその葬儀に参列しました。ビックリしたのは、その葬儀の時に子供と一緒に喪主の席に座っていた奥様、まったく見ず知らずの方だったの。私が奥様として親しく付き合っていた方はどこ

にもいなかったの。その所長さんが奥さんと称してアブダビに連れてきていたのは奥さんではなく、愛人だったらしいの」と語ったのであった。湾岸戦争の時のクウェートやアブダビでの話を聞いて、その後私は海外駐在員に「家内です」と紹介されても、「一概には信用できないな」とも思うようになった。

湾岸戦争が日本に問いただした最大の課題は、日本の国際貢献のあり方であった。

米国は日本の多国籍軍への参加を熱望し、「これへの参加の有無が今後日本が責任ある大国になれるかどうかの分岐点になる」とまで警告したが、憲法の制約からこれに加われない日本は多国籍軍に対して、130億ドルの金融支援を行った。しかし、クウェート政府が戦後米国紙に出した支援国向けの感謝広告には、日本の名前がなかった。カネだけ出し、人を出さなかった日本の貢献への評価は低く、日本外交にはトラウマが残った。

このトラウマによって、それまでタブーだった自衛隊の海外派遣への道が開かれたのである。湾岸戦争直後の1991年のペルシャ湾での機雷掃海、国連平和維持活動(PKO)への参加が嚆矢となり、その後さらにアフガニスタン、イラク戦争に特措法で関与するなどにつながっていった。さらに、2015年には憲法解釈変更で集団的自衛権の行使を解禁する安全保障関連法が成立した。

湾岸戦争は、日本以外の国にもさまざまな課題を与えることとなった。アラブについて言うならば、アラブ諸国間の亀裂が深まったことが挙げられる。前述したように、フセインは「国際社会対イラク」の戦争から「欧米対イスラム」の戦いに持ち込もうとしたが、最終的には彼の目論見は外れた。アラブやイスラムの民衆には受け、ヨルダン、イエメン、PLOなどはサダム・フセインを支持したが、サウジアラビアなどのGCC諸国、エジプト、モロッコ、シリアの九ヶ国は多国籍軍に参加し、長年信奉されてきた「アラブの大義」が揺らいだ。

また、米軍のサウジアラビアでの長期駐留、同国からのイラク空爆、クウェートへの進撃などはイスラーム世界、とくにアラブ世界に大きな衝撃を与えた。「聖都サウジアラビアに異教徒が乗り込んだ」という思いが、テロリスト、オサマ・ビン・ラーディンを生むきっかけにもなったのである。

主な参考文献：

「ホメイニーからビン・ラーディンへ」(小山茂樹、第三書館、2011年)

「ボロをまとった暮らしから 一世代で裕福に」

(ムハンマド・アル・ファヒーム著、井上信一訳、ロンドン・センター・オブ・アラブ・スタディーズ・リミテッド、1997年)

「石油はいつなくなるか」(小山茂樹、時事通信社、1998年)

「人質とともに生きて」(片倉邦雄 毎日新聞社 1994年)